

#### 狸 4 虎挟みと狸 = = = 猪・鹿・狸より

狸を虎挟みで捕った時代は、もう三〇年も前に過ぎていた。あてもない山へ何程かけておいても、自体いなくなったものが、やって来て掛かりようはなかった。それよりも後を尋ねて出かけて行けば、まちがいなかったのである。一頃カンシャク玉というのを噛ませて捕ったこともあったが、警察がやかましくて、すぐ駄目になった。

でも虎挟みで捕った頃には、面白いように捕れたそう。背戸の山へ三つ掛けて、それがみんなはずれていたこともあった。皮を剥いで軒に吊るすか吊るさぬ間に、もう毛皮買いが来て買って行った。皮の値も今から思うと嘘のように廉かったが、それでもあくせく百姓などして働くより割がよかったと、北山御料林下の街道端に茶店を出していた爺さんは語っていた。その頃は、前の畑もたった一枚しか作らなんだ。後は全部ノバコ（草生）にしてあったもんだ。それが狸や狐がだんだん少なくなるに連れて、すこしづつ拵けて行って、一〇年この方は、麦も毎年何俵とか獲った。五、六年前から田も造って、去年は米が六俵もとれたというていた。

しかし盛んに虎挟みを使った当時は、捕るにも捕ったが、一方随分馬鹿な真似をして、とんだ詰まらぬ目を見たこともあったと言う。見事な狸が掛かって、後肢だけ挟まれて、ぴょんぴょん跳ねているのを、みすみす遁がしたことがあった。今思うと随分馬鹿げたわけだが、その時つい妙な気が出て、せっかく生きていたものを、すぐ撲殺しては興がないから、一つ苦しむところを見物してやれと、腰から煙草入れを出して、傍に坐ってゆうゆう煙草を喫み始めた。その時、挟まれている肢の肉がもう破れてしまって、なかから真っ白い筋がはみ出していた。もうその筋だけで、挟みの鉄に引っ掛かっている危ないところだった。狸がもがいてあばれるたびに、少しずつ伸びるのが判った。それでもまさか遁げようとは思わなんだと言う。手前がいくらあばれても、もはや遁げられぬぞよと、呑気に毒づいたものだと言う。そのうち狸が一段ひどくあばれたと思うと、ぷすりと音がして、どんどん遁げてしまった。あまり馬鹿馬鹿しくて、つい声も出なんだと言う。筋を引き断ってしまったのである。

後の挟みを提げて、しぶしぶ帰って来たそうであるが、後になってその話を狩人の一人にすると、俺も狸ではそんな目に遇ったと、同じようなことを語ったそうである。してみると狸には、間々あることだったのである。